
当直
坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当直

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

休日の当直をだ、スコヴィッチ中尉はラスコーニン軍曹、プチャーノフ上等兵と共にウオッカを飲みつつ過ごしていた。その日は至って平和だったが実は。ロシア軍を題材にさせてもらったコメディです。

第一章

当直

休日、日曜の当直を喜ぶ人間はいない。

それはこのイワンⅡスコヴィッチ中尉も同じだ

スコヴィッチは基地の当直室に入ってだ、自分と同じく当直にあ
たっているヨシフⅡラスコーニン軍曹とミハエルⅡプチャーノフ上
等兵に言った。

「やれやれだな」

「はい、日曜の当直は」

「嫌なものですね」

二人もスコヴィッチに苦笑いで応えた。

「折角のお休みが」

「当直とは」

「どうにもですね」

「貧乏くじですね」

「全くだ、ここは平和なんだが」

クリミアと違い、とだ。スコヴィッチは苦笑いのまま言った。今
彼等がいるサンクトペテルブルグ郊外の師団司令部は実際に何もな
い。

外は寒いが建物の中は暖かい、騒動は何もない。

それでスコヴィッチは外の積もっている雪を見つつ話した。

「私達は当直だ」

「平和なのに何をするのか」

「ここにいますね」

その当直室というのだ。

「それならですね」

「やることは」

「酒か」

ロシア人としてだ、スコヴィッチは二人に言った。

「飲むか」

「はい、飲みましょう」

「ここは是非」

「ここは平和です」

スコヴィッチは実に呑気な調子のままラスコーニンとブチャーノフに話した。

「それに我が国ではお酒は」

「勤務中でも問題なし」

「むしろ飲まないと駄目ですからね」

寒い為身体を温めなくてはやっていけないからだ、だからロシア人は勤務中でも酒を飲むのだ。これはあのソ連も止めなかった。

だからだ、三人も勤務中で当直であるがだ。

「他の当直員も飲んでますし」

「何の問題もないです」

「というか普通の勤務中も飲んでますから」

「そこはいいんですよね」

「そう、ここはロシアです」

スコヴィッチは今から飲むことを楽しみにしつつ二人に応えた。

「それでは」

「飲みましょう」

「肴は干し肉がありますから」

「あと向日葵の種も」

「そういうのがありますので」

それで楽しもうというのだ、酒はウォッカだった。

三人は当直室で飲みだした、それも朝から。ロシア軍の休日の当直をはじめたのだ。

三人は飲みつつ適当に仕事をした、スコヴィッチは当直日誌をウォッカ片手に書き終えてから二人に言った。

「これでよしです」

「終わりですか」

「今日のお仕事は」

「今終わりました」

まだ朝の十時であるがだ。

「これで何もありません」

「ですか、じゃあもっと飲みましょう」

「ウォッカは幾らでもありますよ」

どんな状況でも酒だけはある、それがロシアだ。

「飲みましょう」

「何ならアルコールだけでも」

ラスコーニンとブチャーノフはもう顔が赤くなっている、それはスコヴィッチも同じだ。当然基地の中にいる他の当直員達もだ。

休日の当直を飲みながら過ごしていた、そして。

ラスコーニンは牛の干し肉を噛みつつだ、ブチャーノフに問うた。

「おい、御前彼女とはどうだ」

「アンナとですか」

「ああ、どうなんだ？」

「はい、任期が終わって就職したら」

その時にとだ、ブチャーノフは飲みつつ答えた。

「結婚するつもりです」

「そうか、それで軍はか」

「任期が来たら辞めます」
その時にというのだ。

第二章

「結構好きですけれどね」

「それで仕事は何をするんだ？」

「トラックの運転手を」

それをするというのだ。

「免許は持ってますし」

「そうか、じゃあお別れになるな」

「軍曹はまだ」

「ああ、俺はずっとだよ」

「軍隊にいますね」

「馴染んできたからな」

軍隊にというのだ。

「だからな」

「そうですか」

「このままいるさ」

ラスコーニンはこう話しつつだ、窓の方を見た。窓の外は雪が降りかなり高く積もっている。そしてだった。

基地の外の方に何かが見えた、毛深い毛を持ち長い鼻を持っている大きな生きものだ。

その生きものを見てだ、ラスコーニンはこう言った。

「あれなんだ？」

「ああ、何かいますね」

ブチャーノフも窓の外を見てその生きものに気付いた。

「そういえば」

「ああ、あれ何だ？」

「長い鼻に牙ありますね」

「変わった生きものだな」

「そうですね、象に似てますね」

酔った目でだ、ブチャーノフは言った。

「大きさといい」

「そうだな、象がロシアにいるか？」

「熊じゃないんですか？野生の」

ブチャーノフは適当に言った、酔っているのもう思考があれな状況になってしまっているからこその言葉だ。

「象じゃなくて」

「そうか」

「そうですね、まあ飲みましょう」

「そうだな」

「野生の熊なら別にいいですよ」

当直士官のスコヴィッチも飲みつつ窓の外を見て言った。

「軍隊の出る幕じゃないです」

「はい、漁師の仕事ですね」

「要請が出たら出動して」

「それで、ですから」

「要請は出ていないですから」

だからとだ、二人も話す。

「このまま飲みましょう」

「熊なら問題なし」

「そういうことですね」

ラスコーニンとブチャーノフも言う、そしてだった。

三人は窓の外のその大きな生きものを熊と思って放置した、それは基地内の他の当直員達もであった。

その生きものを見てもだ、酔っていてだ。

熊か何かと思って気にしなかった、それで午前中は終わった。

スコヴィッチ達は昼食の後も飲んだ、ウォッカを心ゆくまで楽しみ。

トイレに行ってもだ、その施設のところを。

透き通った身体 of のしかも大戦中のソ連軍の軍服を着ている男を見てもだ、スコヴィッチは笑って彼に声をかけた。

「おトイレですか？」

「・・・・・・・・・・」

男は応えない、ただそこにいるだけだ。

だがその彼にだ、スコヴィッチは赤ら顔で声をかけ続けた。

「冷えますからね、実は私も」

「・・・・・・・・・・」

やはり答えない、だがそれでも声をかけ続けるスコヴィッチだった。

「飲み過ぎですね、トイレが」

「・・・・・・・・・・」

「近いんですよ、お互い大変ですね」

こう話して用を足すのだった、そして。

当直室に戻ってだ、ラスコーニンとブチャーノフに言うのだった。

「おトイレに誰かいましたね」

「ああ、いますね」

「無口な人が」

二人もこう返した。

第三章

「何か少し違う感じの」

「あの軍服古くないですか？」

「俺達の軍服よりも」

「古い感じの」

「そんな感じですね、まあ基地の中にいるってことは
スコヴィッチは今も飲みつつ話す。

「正規の軍人ですから」

「ですね、じゃあ」

「別におかしくないですね」

「たまたま古い服着てるんでしょ」

「他に服がなくて」

こう考えるのだった、そしてだった。

三人は尚も飲んだ、夕食が終わっても。

もう雪は止んでいた、僅かだが夕焼けも見えていた。その夕焼けの空を見上げてだ、ブチャーノフはあるものを見た、それは。

「あれ、あれは」

「どうしました？」

共にいるスコヴィッチが問うた。

「何かいますか？」

「空に」

その空を見上げつつ言うのだった。

「太陽がもう一つ」

「ああ、あっちに」

見ればだ、太陽とは別の方にもだ。

丸く光るものがあつた、スコヴィッチもそれを見て言った。

「もう一つありますね」

「しかも動いてますね」

「速いですね」

東から西に動いていた、その太陽は。

「随分と」

「あれは太陽じゃなくて」

「流星でしょうか」

酔った目での言葉だ。

「太陽でないとすると」

「そうかも知れないですね」

ブチャーノフも応える。

「太陽が二つあるとは考えられないですから」

「そうですね、流星です」

スコヴィッチは笑って言った。

「昼に月が見える時もありますし」

「流星が見えることもですね」

「あるそうですから」

スコヴィッチは星については詳しくないしあまり興味がないのでこう言った。それでこうした普通に言ったのだ。

「ですから」

「そうですね、流星ですね」

ブチャーノフも頷いた、そしてだった。

二人はその丸く光るものから目を離れた、その流星らしきものが幾つも出て何処かに飛んで行ってもだった。

彼等は気にしていなかった、そのうえで彼等の当直室に入ってしまった。

先に食事に行っていたラスコーニンとまた飲みだした、シャワーを浴びてだった。

寝る時になってだ、スコヴィッチは二人に言った。

「これで当直は終わりですね」

「後は朝まで寝て」

「起きて朝飯を食って」

二人も笑って応える。

「その後はですね」

「当直を交代して」

「それで終わりですね」

「今回の当直も」

「はい、今回の当直も何もありませんでした」

スコヴィッチは本当に何でもない顔だった。

「穏やかな休日でしたね」

「クリミアと違って」

「本当にここは平和ですね」

「平和が一番」

「例え軍隊でも」

「そうです、平和で何もない世の中が一番いい」

まだ飲みつつ言うスコヴィッチだった。

第四章

「何も出て来ないのが」

「ええ、今日も平和で」

「本当に何よりでした」

ラスコーニンとブチャーノフも飲みつつ応えた、そして。

三人は消灯をしたがこの時窓の外に何か得体の知れない者達を夜の中に見たが敬礼で返した、深夜のパトロールだと思って。

そしてベッドで寝てだった、朝には当直を交代した。スコヴィツ

チは隊長に当直日誌を出したそこで隊長に問われた。

「昨日も平和だったな」

「はい」

満面の笑顔での返事だった。

「実に」

「それは何よりだ」

「本当に何もありませんでした」

「そうだな、この基地は今日も平和だ」

「明日も」

「少なくとも当分この辺りが騒がしくなることはない」

サントペテルブルグ近辺にあるこの一基地はというのだ。

「ウクライナから遠いしな」

「だからですね」

「平和だ、寒くてもな」

「そういうことですね」

「さて、ではだ」

隊長は当直日誌を受け取ってからだ、すぐにだった。

二つのグラスとウォッカの瓶を出してだ、スコヴィッチに勧めた。
「一杯どうぞだ」

「隊長のおごりですか」

「そうだ、当直が終わったからな」

そののささやかな祝いとして、というのだ。

「どうぞだ」

「では有り難く」

「昨日は飲んでいたな」

「はい、休日の当直でしたし」

普段以上にとだ、スコヴィッチは正直に答えた。

「そうしていました」

「そうだな、だが今日もだな」

「はい、飲まない」と

「やっていけないからな」

「ロシアでは」

「ロシア人は飲む為に生きている」

隊長も笑って言う。

「それは朝からだ」

「寒くてやっていけないですから」

「そうだ、ではな」

「一杯ですな」

「飲んで軍務に戻ってくれ」

「それでは」

スコヴィッチはにこりと笑って隊長に応えて彼が勧めるウォッカを飲んだ、そうして昨日何もなかった平和な当直の時に飲んだ大量のウォッカのことを思い出したのだった。彼が昨日のことで思い出したのはそれと楽しく一緒に飲んだ部下達のことだけだった。

1
5
·
3
·
2
3

当直

完

2
0

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~14151

当直

2015年09月01日 00時27分発行